

ショートショート集

土性武蔵

特別な仕事

佐藤は部屋に入って嚴重に鍵を締めた。分厚い壁に囲まれた中には落ち着いた色の家具が一揃えで置いてあった。部屋の真ん中には相変わらず無機質な造りのテーブルとイスが用意してある。

ああ、ここに来ると嫌でも自分のやっていることを思い出してしまう。頭が痛くなってきた。彼はこれから行う仕事のことを考えないようにした。

佐藤はエックス社に勤めている。普段は他の社員と変わらない。ただ違うのは、彼だけは週に1度、別の仕事をしているところである。給料が一回り高い分、特別な仕事を行っているのだ。社内では本人と最上層部の人間しか知らない。勿論内容は誰にも言うてはいけないことになっている。

その業務は決められた日の夜に社内の奥の、さらに奥の方の部屋へと向かうことから始まる。まるでスパイ活動でもしているような、どうしようもない後ろめたさが彼の同僚なのだ。

佐藤はイスに深く腰かけた。硬質な見た目に反して、なかなか座り心地がいい。長時間座っていなければならないため、身体に合わせて楽な姿勢を維持してくれるのだ。収まりのいい位置を見つけると、付属のリモコンで今の気分と体調を入力する。すると、テーブルには水の入ったコップと数個のカプセル状の薬が現れ、部屋には耳障りのいい音楽や環境音が流れ始めた。

薬をいつも通り手際よく水で流し込む。即効性かつ特別なリラックス効果があり、おかげで頭痛はすぐに治まって少しずつ落ち着いてきた。しばらくすると、すっかり眠ってしまうようになっていた。

ぐっすり寝ている佐藤はとても楽しい夢をみていた。

いつの間にか懐かしい実家のリビングにいる。見下ろしているような光景だったのに何も疑問に思わなかった。部屋の中心にはアルバムで観たことのある自分の後ろ姿があった。これは幼稚園に行っていたくらいの年齢のころくらいか。

リビングを覆ってしまうくらい大きな白い画用紙にたくさんの絵を描いていた。隣には若かりし頃の母親が満足そうに微笑んでいる。そういえば小さい頃は絵描きになるのが夢だったか。周りには紙だけではない。クレヨンも色鉛筆も何でもある。幼い彼は童心にかえて思い思いの絵を描いていた。毎週欠かさず観ていた特撮ヒーローと怪獣の戦闘シーン。ワクワクしながら妄想していた昆虫同士のバトル。園の運動会で活躍したときの勇姿。次々と生まれる作品を見ては、ああ、あんなものが好きだったなあ、こんなことやってたなあと数々の思い出に懐かしんだ。今の彼はずっと天井近くで漂っていた。

映画のカットが切り替わるように次の場面へと移る。これは実家の、自分の部屋か。またもや

机から本棚にベッドまで見渡せる変なところにいたが、違和感を感じなかった。今度の佐藤は中学生か高校生だろう。

テストが控えているのか机に向かって勉強している。そうだ、この時は夢に向かって一生懸命突き進んでいたはずだ。自分の作ったものによって他人に影響を与えるようになりたい。そんなことを考えていた気がする。多感で将来の不安や好きな子に対してもやもや悩んでいたあの頃の自分。でも安心して欲しい、君はちゃんと進むべき道へ行けるのだから。

同じようにして、佐藤は自分の人生を振り返っていった。楽しかった思い出や人生のターニングポイントがショートムービーのように上手くまとまっている。各シーンは夢の中だからか、感傷に浸れるようにか、効果的に演出されていた。どれも今の彼を形作るにはふさわしいようなエピソードに思われる。素晴らしい出来映えだった。

最後は彼の入社してすぐの頃。働く意欲に溢れた、キラキラと目を輝かせる彼の姿があった。これまで同様、ふわふわと浮かんでいる現在の彼は当時の自分に共感していく。それはもう今すぐ仕事に戻りたいくらいに。

後味のいい目覚めだった。佐藤はちゃんと地に足をつけて、気持ちよくイスにもたれかかっている。目の前のテーブルには、眠りにつくときには無かった時計がセットされており、横には普段彼の使っている洗面用品、着替え。この業務明けはいつもこの部屋から出社する。時間にはまだ余裕があった。のんびりと身支度をしながら、彼はつい先程までみていた夢の中身を反芻していた。

佐藤はいつも社内では激務をこなし、トップクラスの成績を残している。広告代理店というシビアな環境にも関わらず、彼は自身のアイデア力とデザイン、何よりも熱い熱意によって勝ち抜いていた。しかし、近寄りがたいようなギラギラした雰囲気はない。彼には常に夢を追い求める純粋さがあると言って、上司から部下まで誰もが尊敬と信頼とを抱いていた。エックス社には彼ほど仕事と自分の夢をマッチさせて、充実した働き方をしている人間はいない。そんな彼を見て働く意欲の湧かない社員がいるだろうか.....。

今やどの会社でも優秀な社員に目をかけて、こういう特別な仕事をさせるようになった。どこもおおっぴらにはしていない、優秀で秘密を守る人間にしか頼まれないものだ。彼らは夢を叶えて生きている姿によって、皆の憧れとなり、働く心の支えとなり、生きる希望となる。そんな人間が集団内に一人いるだけで能率はいくらでも上がるのだ。最近では上層部によって徹底した体調管理とメンタルケアが行われるようにまでなっている。

夢ややりがいがいだけでは生きていけない世の中になった。神様ではないが、誰かが救ってやらなければならない。その生け贄になったとでも思わなければやってられない。佐藤は今日も元気に出社する。

自分だけ変なものが見えるという話は案外巷に溢れているらしい。靈感だなんだと言って、話題の種にするものなのだそうだ。

そうはいつでも周りに直接打ち明けることはなかなか出来ないもの。変な子だと思われるのは嫌だった。

私はスマホのメモ帳に日記として残すことにした。いつかブログやSNSのネタにでもするつもりで。

「それ」が見えるようになったのは、数日前からだった。

その日は仕事納めの金曜日。起きた特別な出来事と言えば、事故のような現場に遭遇してしまったくらいだった。

遭遇したと言っても、通勤途中の電車内で見かけただけ。私から見て、向かい側に座っていた中年の痩せた男性が突然倒れたのだ。

座席について二駅ほど後で乗ってきた人だった。今から思うと、扉が開いて入って来たときから顔色は悪かった気がする。その男はずっとぶつぶつと呟いていた。

独り言喋りながら歩いてる人最近多いよね。ハンズフリーなのかそれ以外なのかも分からないから怖いわ。大体は目を合わせないようにしてるけど……。同僚の一人がそんなことを話していたことを思い出した。

真似させてもらうことにしよう。カバンからスマホを取り出した。

アプリを開くと数件の友達申請が届いていた。相手を吟味しながら許可ボタンを押す。次はファッション情報のサイト……。

あれ、うめき声が聞こえる。目の前にいるため、ついつい気になって時折視線を向けていた。

男は苦しそうにじたばたともがいている。

周りも異常な様子に気がついたらしい。誰かが非常ボタンを押した。車掌さんが慌てた様子でやってくる。

私は邪魔になっては悪いと思って、席を立ち、少し離れた位置へと移動した。騒ぎが大きくなると面倒そうで嫌だった。

男は次に到着した駅で抱えられて下ろされた。その後どうなったのだろう。

休日の間、私は家事や録画していたドラマを観る他は取り立てて用事もなかった。外へと出歩くこともなかった。

土日は実家で過ごしている。平日は忙しくて出来ない分、家事を一通りこなして、後は好きなことをしていた。

土曜日の朝、7時には朝食を作り終える。キッチンから出た私は、起きてきた両親と私の間に何かがあることに気付いた。

糸、のようなものだった。少し太くて毛糸くらいのサイズはあるような気がする。身体の中心同士を結んでいるようだった。驚きはしたけれど、不思議とすぐに見慣れてしまった。

こういうときは案外冷静でいられるものなのかな。家事をし終えてから、謎の糸について調べてみた。

いくつかのことがわかった。

その糸はゴムが伸び縮みするように、近付くと太くなって離れると細くなる。

よく見ると、私から両親に繋がる分以外にも何本か家の外へと続いている細い糸がある。

どうやらある一定の太さより細くなると目には見えない。

物に当たっても物理的には何も起きない。例えば、柱を二手に別れるように通り過ぎても、糸は柱に引っかかってその分伸びるだけ。しかもある程度伸びると柱をすり抜けて再び二人の間を真っ直ぐに結んでいる。

こんなことを確かめているうちに今週の休みはあっという間に終わってしまった。

今日はもう出勤しないといけない。

私は支度を終えて、実家を出た。

外には信じられない光景が広がっていた。

街を歩くと周りはそれはもうたくさんの糸、糸、糸。

一人一人から何本もの直線が出ている。その直線はすぐ隣の人と繋がっているだけのものあれば、どこまで続いているのか分からないのもあった。いくつも引っかかって絡み合っている。

それぞれの線が放射状に、クモの巣のように、広がっていた。

糸の数は人によって違うのだろうか。酷い人は糸が多すぎてハリネズミのようになり、姿も見えなくなる程だった。

そこまでいくと気持ち悪くて、とてもじゃない。人を直視なんてできない。このままだと街の真ん中で倒れてしまいそうだった。

ふと自分の身体を見ると、私から出ている糸と他人の絡まった糸が巻き付いていた。首元、胸、足、それはもう身体中に。何となく染み出てくる嫌悪感。視線を浴びているような、圧迫感。

駅へ着くと、つばめの巣のようになってしまったホームへ向かう。いつも乗っている乗車位置へと歩く。気分は優れないままだ。電車がちょうど来たところだった。

やめておいた方がいいとは思った。無意識の底にある警報の、ジリジリと鳴っているような気分。

それでも人混みに流されるように乗ってしまった。

電車のなかはさらに糸だらけだ。周りの乗客は皆スマホを眺めている。

あ、たった今日の前の女性から新たな糸が伸びていった。周りを見渡すとスマホを持つ人達はさらにたくさんの糸。ああ、絡みついてくる……。

しかも皆の手が忙しく動く度に増えていく、また私の首元あたりに引っかかって……。

もう耐えられない……。どうしてこんなものが……。何で、何で、何で……。ああ、もう、首に巻きついた糸がきつくなって……。ほどいて。

身体が軋む。捻れる。痛い。たすけ

目の病気

エヌ氏はたった今スクリーンに映った文章を一通り読み上げた。

「本日の活字数制限に達しました。業務を終了してください」

エヌ氏はメガネの位置を直すために一呼吸すると、早々に帰る支度を始めた。これ以上仕事を続けると労働文字基準法に違反してしまい、下手をすると首になってしまうからである。わざわざ働いてまでルールを破ろうとも思わないので、残ろうとする者はいるわけがなかった。

エヌ氏は会社を出た。帰る途中に本屋に寄ることにした。最近は本、漫画、雑誌のようなものはすっかり贅沢品となったので店の数も少ない。遠回りをしてようやくたどり着いた。

エヌ氏は素敵な詩にきれいな絵が添えられた絵本と自分の小さい時に夢中になった冒険ものを買った。勿論選ぶ時にも目を労わるように店側が工夫をしている。客は家に帰って、貴重な時間と活字を存分に楽しむことに専念するのである。

帰り道、道路には歩行者用のベルトが稼働している。家のある方向へと続く路線に乗りこむと、アイマスクをつけるのが普通だ。ある者は音楽やオーディオブックを聴き、ある者は手先だけで器用に携帯パズルゲーム機を遊んでいる。

乗り込もうとしたエヌ氏は、ちょうど同時に居合わせた会社の同僚と会った。いつも通りやあと声をかける。二人が乗り込むとベルトが動き始めた。各々のカバンからアイマスクを取り出してつける。エヌ氏は思わずため息をついて、恒例の恨み節を連ねた。

「全く嫌な世の中になったものだ。今もこうして顔も見えないままで話をしなきゃいけないなんて。」

「しょうがないじゃないか。目を大事にしなきゃ生きていけないだろう。君もそうしてマスクをしているじゃないか。」

「それは仕事や学校、様々な手続きといった時間以外でさえ、決められた文字数しか読めないからさ。余計に文字を見たくない、目を使いたくないと思うのが当然だろう。とはいえ誰とも目を合わせることもないこの殺風景はさすがに気味が悪い。」

「そのような時代に生まれてしまったから文句を言ったって仕方がないだろう。不必要な時まで目を酷使するせいである重い病にかかりやすくなってしまったとも聞くし。むしろ新しく改良されたメガネのおかげで規制が緩和されてきたのだからましな方だろう。じゃあな。」

同僚が一足先に降りてしまって愚痴の相手を失ったエヌ氏は、家での至福の時間を妄想して時間をつぶすことにした。

家につくと妻と子供たちが待っていた。

「あら、おかえりなさい、あなた」

「パパ、おかえり」

妻は家のシステムにつながっている端末の画面で、洗濯の設定をし終えたところらしく、メガネをつけていた。子供たちは最近人気の曲を聴いていたようだ。耳元までつながったタイプのアイマスクをつけている。

エヌ氏は待ちに待っていたとばかりに、部屋へと向かった。買ったばかりの本をのんびりと読むために、仕事でも帰り道でもしっかりと目を守ってきたのだ。この小さな幸せを何よりも大事にしていた。

そんなエヌ氏に妻が声をかけた。

「待って、あなた。今日は子供たちのために新しいメガネを買ってあげる約束よ。早く注文画面で手続きをしてあげてちょうだいよ。」

「そんなのお前がやってくれたらいいじゃないか。疲れているのだから好きにさせてくれ。」

「私もお気に入りの雑誌を読みたいの。たくさん家や子供たちのことで頑張ったのだからあなたがやってよ。」

「こっちも仕事をして疲れているのだ。せめて後にしてくれないか。」

「あなたは部屋に閉じこもったら規制文字数のぎりぎりまで出てこないじゃない。そのせいでこの前学校の手続きが出来なくて大変なことになったでしょう。結局私がやったことを覚えていないのかしら。」

面倒くさくてぶっきらぼうに返事をしたのが悪かったらしい。妻の声に怒りが混じっていた。

「分かったからそう怒鳴らないでくれ。今日はちゃんと早めに切り上げるさ。」

「いつも同じことばかり言って全然約束を守らないじゃない。ちゃんと目を見て言ってくれるかしら。」

二人ともだんだんと語気が荒くなり、エヌ氏は思わず口を滑らせてしまった。

「あまり目を無駄遣いしたくないのだ。勝手にやってくれ。」

「何よ。そんなこと言うならあんたと目を合わせるなんて私の方が願い下げよ。」

後はもうひどい有様であった。ヒステリックに責めたてる妻に、怒鳴り返すエヌ氏。傍らでおびえる子供たち。

もうちょっとやそつとではけんかは止められない。二人の目には相手の目はおろか顔も映っていないし、子供たちの姿も見えてはいない。しょうがないのだ。これは重病なのだから。盲目的になってしまうという症状なのだ。